

名城大学

経済・経営学会会報

No.42

『名城論叢』
第十一巻 第二号 付録
二〇一〇年九月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

旧東欧の産業遺産 ……宮崎信二 1
南アワールドカップを終えて ……富岡 徹 26

本当に求められている
「国際人」とは何か ……高山晃郎 32

旧東欧の産業遺産

——フライベルク(旧東ドイツ)、
シレジア(ポーランド)——

経営学部 宮崎 信 二

本稿は、二〇〇九年八月二十九日から九月五日に、ドイツ・フライベルク(Freiberg)で開催された「産業遺産保存のための国際委員会」(The International Committee for Conservation of the Industrial Heritage: TICCIH)の第一四回国際会議(以下、TICCIH 2009)および旧東欧のポーランドとチェコ共和国で行なわれたポスト・コンGRESS・ツアーでの産業遺産の保存と再利用活用についての印象記である。

1 TICCIH 2009

TICCIH 2009は、「産業遺産—エコロジーと経済学」をテーマに三八カ国、世界各地から約三五〇名が参加し、旧東ドイツ

のフライベルクで開催された。共同主催国のドイツ・ポーランド・チェコ共和国をはじめフランス、イギリス、オーストリア、イタリア、スペイン、ポルトガルなどの常連国や、デンマーク、スウェーデン、フィンランドなどの北欧諸国の欧州勢のみならず、クロアチア、ラトビアなどの旧ソ連およびアメリカ・カナダやブラジル、メキシコなどの中南米諸国、さらに日本をはじめインドネシア、インドのアジア諸国やオセアニアのオーストラリアなど、世界各国から個性豊かな多数の人々が参した。

TICCIHは、一九七八年にストックホルムで設立され、現在、ヨーロッパ・北アメリカを中心に六〇カ国五〇〇名以上の会員を擁する「産業遺産」の保存に関する唯一の国際組織である。

ここで聞き慣れない「産業遺産」という言葉は、一般に「過去の産業活動を示す遺跡や遺物」を意味し、建物、機械・道具、装置、工場、炭鉱、倉庫・貯蔵庫、橋梁、水門・運河、鉄道などの「産業の発展に伴う過去の人間の努力——個人、企業や行政機関の営みを体現している」ものをさす。その意味で、産業遺産は、それが作られた時代の技術のみならず社会・地域や文化・人々の生活を、今に伝え・映し出す「物言わぬ証人」であり、重要な産業遺産は、将来に継承すべき文化財としての価値をもつ。特に、二〇〇七年に日本の石見銀山が、アジアで初

めて産業遺産として「顕著な普遍的価値を有する文化遺産」と認定され、UNESCO 世界遺産登録されたことから、産業遺産が一躍脚光を浴びることとなった。特に、TICCIH は、二〇〇〇年以降世界遺産への登録への是非を調査・評価し答申する国際記念物遺跡会議 (ICOMOS: International Council on Monuments and Sites) における産業考古学に関する専門的アドバイザーの立場にあり、世界遺産登録の正式な諮問機関として産業遺産の世界遺産リスト登録にあたっての評価を行なうようになってからは、研究者のみならず行政機関からも注目されるようになった。TICCIH 2009 には、日本からも研究者だけでなくこれまでの旧富岡製糸場の群馬県富岡市や新たに佐渡金山遺跡の新潟佐渡市からも、本当に真面目で熱心な市職員が参加していた。

二 フライベルク：「ザクセンの銀の町」 (“the Silver City of Saxony”)

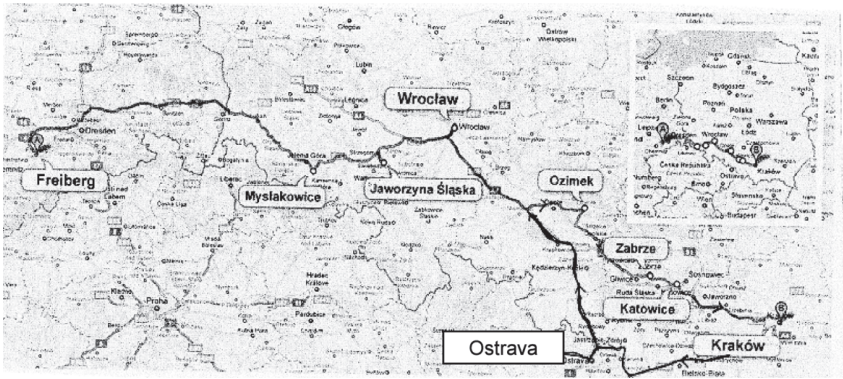
三年に一度開催される TICCIH の国際会議が、なぜ人口五万人たらずフライベルクで開催されるのか？ 一般に知られるライン川上流地域の旧西ドイツに位置し人口二万人の有名な大学町フライブルク (Freiburg) とは異なり、『地球の歩き方』にも載っていない、ちっぽけな町でどうしてかと疑問に思っていたが、学芸に参加してこのなぞが解けた。このフライベルクは、地理的にはドイツ・ザクセン州南部にあり州都ドレスデンから西へ五〇 km、工業都市ケムニッツから東に三〇 km に位置し、

エルツ山地 (Erzgebirge) の豊富な鉱物資源を背景に旧西ドイツのルール地域に対比される旧東ドイツの工業地帯ザクセンのなかでも約八四〇年もの古い歴史をもつ世界的な銀鉱山都市であった(地図、写真1)。

フライベルクの起源は、一一六八年に、銀、石炭、鉄、銅その他の豊富な鉱物資源に恵まれたエルツ山地で、銀脈が発見され採掘されたことに始まる。一一世紀に神聖ローマ帝国皇帝から辺境伯を封領されたヴェティン家のオットー・フォン・マイセン辺境伯が、一二五五年以後に市議会に銀山の探索・採掘権などを許可 (Freigeben, フライベルクの地名の由来) し、これにより市議会は銀採掘者から収益の一〇%を徴集するなど多くの特権を獲得したのであった。

この一三世紀後半のフライベルク鉱山法の下、一四世紀初頭に最初のシルバラッシュをむかえたフライベルクは、銀採掘業者・銀取引商人や鉱夫が住みつき、一六世後半には銀産出が最盛期に達し「ザクセンの銀の町」として発展した。他方、マイセン辺境伯のヴェティン家は、銀鉱山からの収益に支えられ勢力を拡大した。同家は、一四二三年にはザクセン選帝公の地位を獲得しドレスデンに居城を移し、モーリッツ大公(モーリッツは生まれ故郷のフライベルクのドームに安置されている)や、一六九四年にポーランド王を兼ねる強王フリードリヒ・アウグスト一世選帝公までの一八世紀中頃における「ザクセン公国」の繁栄時代には、フライベルクの銀鉱山は首都ドレスデンの華麗な文化・芸術の経済的基盤をなしたのである。³⁾

また、学術的にも、一六世紀の世界最初の本格的な鉱山学術



地図 フライベルク、ポーランド、チェコ共和国の産業遺産ツアーの見学行程
(ポスト・コンGRESS・ツアーの行程地図より)。



写真1 「ザクセンの銀の町」フライベルクの全景とライヒ銀鉱山跡 (TICCIH 2009、
Programme より)。

全集であるゲオルギウス・アグリコラ (Georgius Agricola) の『デ・レ・メタリカ』(De la metallic liber) の調査地区がフライベルクを含む有数の鉱山を有するエルツ山地であった。このエルツ山地は、鉱石山地 (Ore Mountains) と呼ばれ、現在、フライベルクの行政機関により、エルツ山地における炭鉱住宅・鉱石集積場・採掘場・運河やダムなど産業活動の遺産がユニークな文化的景観であるとして世界遺産登録への活動が行なわれている。一七六五年にはヨーロッパでも一、二の古さを誇る専門の鉱山学校ベルクアカデミー (Berkakademie) が設立されており、鉱山学の創始・発展では伝統ある学術都市でもあった。同校は、一九一九年にライヒ (Reich: Zeche) とエリザベス (Alte Elisabeth) の鉱山を保有し、学生用の実践教育と研究を行なった。このベルクアカデミーには、世界から多くの留学生が集まったが、日本からも明治維新後に多くの鉱山技師・学者が留学し、さらに北海道炭鉱開発の米国人 B・ライマンを始め秋田県の鉱山や新潟県の佐渡鉱山の開発に関わった。「お雇い外国人」技師が学んだ大学であり、当時の世界最高の鉱山技術を日本に導入・定着させ日本とも因縁の深い関係にある。

しかし、フライベルクは、ザクセンの衰退と伴にその輝きをうしなう。ザクセン公国は、一八世紀中頃以降には勃興してきたプロイセン王国とハプスブルク家のオーストリアとの両強国間の争いに巻き込まれ衰退し始め、さらに一九世紀にはナポレオンの登場で神聖ローマ帝国が終焉するに伴い「ザクセン王国」へと引き継がれるが、一八六六年の北ドイツ連邦加入ではプロイセン王国に領土の半分を割譲し、形式上の自立のみ残し実質

的にプロイセン王国に従属することとなった。一八七一年の「ドイツ帝国」発足後も形式的に残ったザクセン王国は、第一次世界大戦中の一九一八年の「ドイツ帝国」崩壊により消滅することとなる。こうしたザクセンの衰退とともに、一八三〇年代に三度目で最後の活況をむかえたフライベルク銀鉱山も、一九世紀後半から徐々に操業を停止した。排水設備のコスト高から生産高は減少し始め、利益を確保することが困難となった。排水設備を備えたにもかかわらず、生産の減少に歯止はかからなかった。加えて、一八七一年の「ドイツ帝国」の金本位制導入による銀価格の急激な低下は、フライベルク銀鉱山を完全に不採算な事業にした。一八八六年には、フライベルクの主要な銀鉱山は国有化され、一九一三年には操業を完全に停止したのであった。

一九三三年からナチス・ドイツで一つの州となったザクセンにおいてフライベルク鉱山は、一九三六年には銀の操業を再開し、また戦後の旧東ドイツの社会主義政権下でも鉛や亜鉛、銅などの非鉄金属の採掘を行なったが、一九六九年には最終的に閉山したのであった。この間、ベルクアカデミーはフライベルク工科大学 (TUCCIH 2009) の主権大学となり、現在は、地質学、材料、環境、経済分野を含む工業総合大学として銀・鉱山に代わりシリコンなどの研究により「ザクセンのシリコンバレー」と称され、今日のフライベルク・ザクセンの発展に貢献している。このように TUCCIH 2009 の開催地であるフライベルクは、ザクセンの繁栄と華麗な文化・芸術を支えた歴史的・世界的な銀山都市であった。

三 「ザクセンの銀の町」フライベルのランドスケープ（景観）

フライベルクは元城壁（リンク）内の旧市街と外の新市外に別れるが、歩いて二時間ぐらいで回れるリンク内の旧市街には、「銀の町」として繁栄した産業的・文化的遺産が随所にみられた。古い城壁跡内のリンクの中心には、フライベルクの創設者の象徴オットー・フォン・マイセン辺境伯の像を取り囲むように一六世紀の後期ゴシック様式を体現するタウンホール（Town Hall）や商人館（写真2）が建つオーバーマルクト（Obermarkt）広場。一八世紀初頭、世界的名匠と言われたオルガン制作者ゴットフリート・ジルバーマンによるパイプ・オルガンがあるマリーエン大聖堂（Dom St. Marien）を始めとする一〇〜一三世紀の教会群。中世風の街並みを歩けば、一七九〇年に建設された世界最古の市営フライベルク劇場や後期ゴシック様式の建造物を活用したフライベルク市鉱山博物館（写真3）など、まるで中世にタイムスリップしたような風情。しかし、この中世の城壁都市の景観は、火災で焼失したのも一部あるが、その多くは第二次世界大戦末期のイギリス・アメリカの連合軍によるドレスデンへの猛空爆の並行爆撃で破壊された文化的建造物を、戦後、丹念に修復・再建したものであった。

言うまでもなく、一九四五年二月に行なわれたイギリス・アメリカ空軍による特別の軍事施設もないドレスデンへの空爆は、有名なフラウエン教会やドレスデン王宮・ツヴァインガー宮殿やゼンパー・オパー（ザクセン州立歌劇場（写真4））などの



写真2 フライベルクの中心地のオーバーマルクト広場に建つ市の創設者の象徴オットー・フォン・マイセン辺境伯像と後期ゴシック様式のタウンホール（現在の市役所）



写真3 フライベルクの街並（左）と後期ゴシック様式の聖職者宿舎（右、現在の鉱山博物館）



写真4 再建されたフラウエン教会（左）とゼンパー・オパー（右）

人類や世界の文化遺産を一夜にして灰にしドレスデンの街の八五%を破壊しただけでない。にげまどう多数の女性や子供を含む非戦闘員の一般市民に対して焼夷爆撃や機銃射撃などを行ない数万人の人々が犠牲となるという、「ハーグ陸戦条約」の国際法に反する「戦争犯罪」の疑いのある人類や文明への許されざる無差別爆撃であった。しかし、ポスト・コングレス・ツァーの最終日に訪れたドレスデンでは、こなごなとなった三六万個余りの建物の破片を、可能な限り元に戻して「世界最大のジグソーパズル」と呼ばれたフラウエン教会を始め、バロック様式の歴史的建造物の多くが、長い年月をかけ修復・再建され、今もその作業が続いている。人はなぜ愚かな行ないを繰り返すのか？二度と戦争の惨事がおこらないことを願うとともに、日本ならさつさと再開発し新たな建物を建ててしまふのに、ドイツ人（あるいはヨーロッパの人々）の自分たちの伝統（歴史）や文化へのこだわりはなんなんだろうと感じざるをえなかった。

ともあれ、ドイツ人の文化的遺産や伝統（郷土への愛着？）により再建されたフライベルクは、「ザクセンの銀の町」の繁栄と中世の雰囲気（中世都市景観）を漂わせ、一九八九年の民主化以降も、多くの観光客を誘致することに成功している。一六世紀に築造されたフェルデンステイン城（Freudenstein Castle）は、二〇〇四年にフライベルク市が買い取り修復して、二〇〇八年からさまざまな鉱石を世界中から収集した世界最大級の鉱石博物館として再利用され、TICCIH 2009 では歓迎レセプションの会場となった。当日の歓迎レセプションで、「冶金と鉱山労働者組合」の伝統的な衣装を身にまとったパレード（写

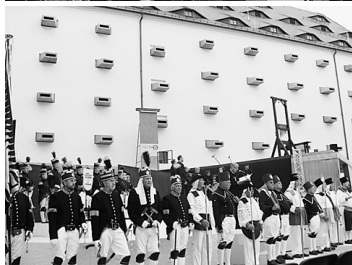


写真5 改装したフェルデンステイン城（左上、現在の鉱石博物館）前に正装した鉱山労働者のパレード（左下）と「冶金と鉱山労働者組合」旗（右）

真5)が主催者や役員の先導役を務めたが、このパレードは毎年六月に開催される「鉱山祭り」(Bergsfest: Mining Festival)の一大イベントであり、また「鉱山祭り」は何千人もの観光客が訪れるザクセンの最大級のフェスティバルとなっている。当日のレセプションの最後には、「冶金と鉱山労働者組合」の歌が合唱され、参加者全員が敬意を表して起立したが(日本ではみられない光景)、フライベルクさらにはザクセンの郷土を八〇〇年間の長きにわたり潤し、文化や伝統を支えてきた銀鉱山や誇り高き鉱山労働者への畏敬の念が込められているように思えた。

さらに、フライベルクでは、銀鉱山が地域社会や文化に深く関わる景観(ランドスケープ)として、ライヒ鉱山とエリザベス鉱山跡が見学ツアーに活用されている。一四世紀に開発され一九一三年閉山された銀鉱山は、一九一九年からベルクアカデミーが実践教育と研究用に保有し、一九三七年から一時銅・亜鉛などを採掘したものの一九六九年には最終的に閉山した。一九九二年には財団が設立され鉱山遺産として一般に公開され、地下坑道の見学ツアーにより児童や学生への炭鉱や地域の教育用、さらに観光客向けの産業観光に役立てている。

私たちは、学会が最終日に催したライヒ鉱山での簡単な体験ツアーとエリザベス鉱山の見学会に参加し、一四世紀から二〇世紀までにおける銀鉱山の歴史をみる事ができた。

ザクセンで一四世紀と最も古くまた重要なライヒ鉱山(写真6)では、館内の鉱石類や野外には鉱石搬送用の坑内軌道機関車や鉱車、機械類も展示され、また地下坑道の体験ツアーが用

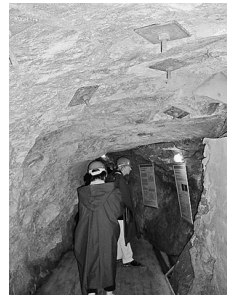
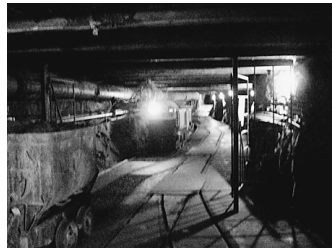


写真6 ライヒ銀鉱山の全景(左)と地下坑道(右)

意されていた。体験コースは、全体で一四kmの水平と垂直の坑道からなり、深さは二三〇mに達する。体験ツアーは、一六世紀の歴史的な鉱山の展示や一九世紀や二〇世紀の坑道や鉱山設備を紹介する一般コースの一時半や二時間半から、一四世紀から二〇世紀までの鉱山の歴史を体験できる四時間～六時間にあぶ見学コースやクリスマスなどの特別コースまである。学会主催の簡単な体験ツアーに参加した私たちは、まず見学者用作業衣とヘルメットを着用し、懐中電灯を持ち、どうみても古そうなりフトにガタゴトと揺られながら「大丈夫かなあ」という気持ちで地下坑道に到着。ガイドに従い、一九世紀・二〇世紀の採掘坑跡や鉱山の採掘資料の展示をみながら見学する約三〇分の駆け足の体験ツアーであったが、日本の石見鉱山などとは違い規模の大きさにびっくりした。また、個人として一般体験ツアーに参加した人の話によると、おそらく一四世紀からの坑道内には地下水が流れ、ひんやりした坑道の幅は一m位しかなく、狭い隘路や急な階段もあったとのことである。しかし、これらの坑道には、おそらくさまざまな歴史と鉱人たちの生きざまが刻まれているのであろう。

一九世紀のエリザベス鉱山（写真7）では、再建された建物には鉱山資料の歴史的展示だけでなく動態保存されている一八四八年製（一九五四年まで使用）の蒸気機関の模擬実動がなされたり遊戯室の古いオルガンを自由に弾かせたり、見学者に対する日本とは違う姿勢を感じた。また、付属建物はガーデンレストランに活用され、学会閉会パーティが催されたのである。ともあれ、ドイツ人らしい緻密な計画と合理性にもとづく学

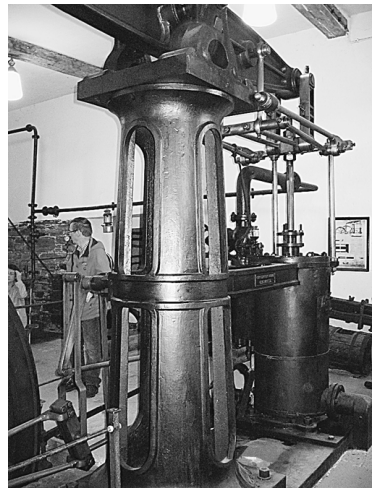


写真7 エリザベス鉱山建物（左）内にある動態保存された1848年製造の蒸気機関（右）

会運営と夕方五時にはビアホールやレストラン以外はほとんどの店が閉まるという中世城砦都市での日本とは異質な景観と時間の流れにやっと馴染み始めたフライベルクを後に、九月六日から九日まで学会主催のポスト・コングレス・ツアーに旅立った。今回のポスト・コングレス・ツアーはオドラ（Odra）川流域に広がるポーランドのシレジア（Silesia）の諸都市とチエコ共和国のモロヴィア（Moravian）州のオストラヴァ（Ostrava）で行なわれたが、一八世紀の工業化から戦後の社会主義政権下までの旧東欧における代表的な鉱工業地帯とこれら産業遺産を保存し、「産業観光」に再利活用しようとする新たな活動を見ることができた。

四 ポーランド・ロワー・シレジアの産業遺産⁴

九月六日（日）の早朝、フライベルクを出発したバスは約二時間でポーランド国境へ。ツアー企画者であり、ガイド役でもあるヴロツワフ工科大学（Wrocław University of Technology）の Piotr Garber 教授から、バスポートとビザの用意をして下さいとの指示。もちろんジョークであり、二〇〇四年EUに加盟したポーランドへは、国境の旧検問所跡（写真8）にパトカー二台がひまそうにいるだけで、国境審査もなしにあっけなく通過したが、これがEUというものかと実感した。車中では、視察先の詳細な資料とともに飲み物・パン・ビスケット等のつまった「ピクニック・バック」が配布され、なんとサービスのいいことかと思ったが、ポーランドのハイウェイには日本



写真8 ドイツとポーランドの国境（左）と平坦なロワー・シレジアの農業地帯（右上）・外資系スーパーの姿も（右下）

のサービスエリアのようなものは、まだ、なかった。一度立ち寄ったガソリンスタンド兼コンビニ風の店でも、トイレの使用を拒否され、野外トイレに行くよう言われた。しかし掃除もされておらず、とても使えるシロモノではなかった。また、ポーランドは通貨統合が行なわれていないので、ユーロも使えなかった。

ポーランドに入ったバスは、遠くに地平線がみえる平坦なロワー・シレジアのハイウェイをひた走った。参加者全員がポーランドは初めてということ、Geppert 教授から戦乱と分割にあけくれたポーランドの歴史が紹介されが、教授がしばしば感慨深げに使われた「つかのまの平和」(short peace) という言葉が印象的であった。それもそのはず、ポーランドの歴史は稀にみる「戦乱と分割」そして「悲劇」の繰り返しである。

二つのポーランド——すなわち一七九五年以前のポーランドと一九一八年以降のポーランド——があるとされている。

前者は、一〇〇〇年頃にポレスワフ一世によって統一され、その後ドイツ人の入植・ドイツ騎士団の進出やモンゴル軍の猛襲もあり分裂したが、一四世紀にはヤギェウオ王朝のもと再統合され、リトアニアとの連合を経て一五七二年から成立した「ポーランド・リトアニア共和国」。しかし、この国は、一七世紀からのスウェーデン、ロシアとの戦争や王位継承戦争（一七三三～三五年）を経てロシアとプロイセン王国およびハプスブルク家のオーストリアによる三度のポーランド分割（一七七二年の第一次、一七九三年の第二次、一七九五年の第三次）で事実上消滅しヨーロッパの政治地図から消えた。以降、ロシア、

プロイセン、オーストリアによる分割統治体制は、ナポレオン体制下の「ワルシャワ公国」やウィーン会議での三分割国統治下で「ポーランド会議王国」が創設されたものの、第一次世界大戦終了まで約一五〇年間変わらなかった。

後者の第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約により独立した「ポーランド共和国」も以前にもまして残酷な歴史が待ち受けていた。第二次世界大戦でのナチス・ドイツとソ連の侵攻によりまたしてもポーランド分割がなされ、世界地図から抹殺された。また、第二次世界大戦後の社会主義政権の下で誕生した「ポーランド人民共和国」は、ソ連の政治力と軍事力の圧力で国土を西方に移したものであった。一九八九年東欧革命の中で、選挙で「連帯」が圧勝し誕生した「ポーランド共和国」は民営化と市場経済化を進展させて、二〇〇四年にEUに加盟した。ソ連の影響下の社会主義体制から転換したポーランドの激動の歴史を身をもって体験した教授の言葉には重みがあった。

私たちの訪れるシレジアは、オドラ川流域の肥沃な平野での農業地帯を有するロワー・シレジアと東部の石炭、亜鉛などの豊かな鉱物資源を有するアッパー・シレジアからなるが、この地も数奇な運命をたどる。一〇世紀にポーランドの一部であったシレジアは、その後プロイセン、ポヘミア、オーストリアなどの争奪戦の対象となった。一二世紀よりドイツ人の入植が進み、ブレスウラ（現在のヴロツワフ）はドイツ人が建設した商業都市であり、ハンザ同盟の一員であった。一六世紀にはハプスブルク家のオーストリア領となったが、一七四〇年代にプロイセン王国の「大王」フリードリヒ二世が侵攻し、七年戦争終

了の一七六三年には形式的にポーランド領として残ったクラフトを除く大部分のシレジアはプロイセン領が確定した。

一八三〇年代からプロイセン王国（一八七一年以降はドイツ帝国）の工業化に伴い、その領有下にあったシレジアでは、一八四〇年代には繊維産業や炭鉱業が急速に発展し有数の工業地帯となった。一九一九年ドイツ帝国崩壊によりアッパ・シレジアの一部は再建されたポーランドに割譲されたが、ナチス・ドイツが進攻した第二次世界大戦時には、シレジアの主要な都市や産業は戦火によって破壊され廃墟となった。ナチス政権下では親衛隊やドイツ系自衛団によるポーランド系住民の虐殺や追放が行なわれ、ユダヤ人に対する「絶滅収容所」として有名なアウシュヴィッツがアッパ・シレジアのクラクフから数十キロ離れた地に設置され、ポーランド（ポーランドの全ユダヤ人三〇〇万人の約九割が殺害されユダヤ人社会を抹殺）のみならず占領下のヨーロッパ全土から多くのユダヤ人を貨物列車で輸送し、史上例をみない大量虐殺が行なわれたのである。

私たちのバスは、戦火と悲惨な歴史など何もなかったかのようになり、のどかなロワー・シレジアの農業地帯をひた走り、昼過ぎ最初の訪問地であるミラロヴィチェ（Mysłakowice）のオルゼー亜麻（リンネル）織物工場（Flax Spinning Mill "Orzel"）に到着した。

オルゼー（Orzel）社の亜麻織物工場は、一八四〇年代初頭にシレジアで初めて建設された機械制工場であり、一七〇年余りの年月を経た現在でもオリジナルな姿をほぼ完全にどめている工場建築物である（写真9）。一九世紀初頭に、イギリスから

の機械製の亜麻布が大量に輸入されたシレジアでは、従来の手工業による国内製品の需要を減少させ手工業システムを崩壊させた。一八四〇年代初頭にプロイセン王の勅命で設立された王立貿易商務協会の直接監督の下で、一八三九年に機械制紡績工場の建設が決定され、王の助言者ハーマンやプロツワフの産業家のルフー（Ruffer）をコンサルタントに、当時のイギリス・フランス・ベルギーで最良の紡績工場で仕事・研究を行っていた工場技術者カセロワスキー（Kaselowski）の指揮により工場建設が始まり四三年に完成した。同工場は一八四四年から機械生産を開始し、一九八九年まで稼働したのであった。

シレジアの機械制工場のパイオニアである同工場の外観は、ほぼオリジナルな姿をとどめるだけでなく、内部の骨組みも二本の柱に支えられた大梁からなるという一八世紀初頭のイギリス建築技術の様式がみられるものであり、シレジア地方での工業化と建築におけるイギリスの影響を示すものとして、歴史的・文化的に意義ある産業遺産であるとのことであった。また、工場敷地内には、一九世紀末に蒸気機関に入れ代わるまで動力として利用された水車への水路が残っており、当時の雰囲気を漂わせていた。同工場は、ドイツのもとで両大戦の時期には軍事に転用され、また戦後のポーランドでは社会主義政権の管理下におかれ、国営工場として、一九六六年には従業員二六八〇名を数え、製品の八〇%をアメリカ・イギリス・ドイツ・オーストリア等に輸出したのであった。民主化後の一九九五年には民営化され、二〇〇七年には株式発行もなされた。現在も稼働している同敷地内の工場の一部を見学したが、機械設備も古く、



写真9 19世紀のオルゼー亜麻織物工場図(左上)、現在の工場跡および水路(左下)と工場跡内部(右上)と現在のオルゼー工場の内部(右下)

人影もまばらで従業員も数十名から多くても百名程度に思われた。帰り道に展示場兼みやげ物屋風の同社の小さな店があったが、なんとなく寂れた感じであった。オルゼー亜麻織物工場建築物は、かつてのロワー・シレジアにおける繊維産業での産業革命を担ったパイオニアとしての姿を残すものであり、一七〇年余りの戦火と激動の歴史を見守ってきた工場建築物の産業遺産として保存されることを願うだけであった。

ヤボジナ・シロンスカ (Jaworzyn Śląski) のシレジア産業・鉄道博物館 (Museum of Industry and Railway in Silesia) では、ポーランドでの産業遺産活用の新たな取り組みをみる事ができた。同博物館は、シレジアの産業遺産の保存を目的に二〇世紀初頭の操車場・転車台や機関車車庫・エンジン工場跡を再利用して二〇〇四年にオープンしたものである(写真10)。

プロイセン領有下で一八四〇年代から産業革命が進展したシレジアでは、鉄道建設も進められた。一八四三年にフライベルクとヴロツワフ (Wrocław) 間の民間での鉄道建設が決定され建設が進められ、一八四四年にはヤボジナ・シロンスカにロワー・シレジアで最初の操車場が作られた。一八九〇年代には同鉄道は国有化され、二〇世紀初頭には同操車場には扇形の機関車車庫や他の諸施設が拡張された。さらに、一九二〇年代には電化に伴い電気機関車の車庫が建設され、一九四〇年代には付随的な機関車工場が追加されたものの、第二次世界大戦後の社会主義下のポーランドでも、操車場には大きな変化はなく一九九〇年代まで使用されたのである。

シレジア産業・鉄道博物館は、一九〇七年に建設された扇形



写真10 シレジア産業・鉄道博物館の入り口(左上)と転車台の機関車(左下)車庫跡を利用した館内の展示と全景写真をバックにしたステージ(右の上下)

のレンガ造りによる機関車工場の建築物・転車台や車庫等の諸施設を保存し、再利用するとともに、一九世紀末から一九七〇年代までのポーランドやドイツ・イギリス・アメリカ等から集めた五〇車両余りの蒸気機関車や多数の客車・貨車を展示している。しかも、動態保存され見学者向けに蒸気機関車や気動車を使って車庫から転車台を経由し数一〇〇mの実際の運行がなされている。さらに、工場跡を再利用した館内には、シレジアから収集された農業機械やラジオ・テレビなどの通信機器、タイプ・コンピュータのみならず、なぜか、ユニークなコレクションとして一九二四年から一九七八年までのアメリカのハーレー・ダビットソンが展示され、また、子供や若者向けに玩具博物館が開設されることであった。しかし、多様なコレクションは、歴史的な関わりも不明で説明もなく展示され、博物館そのものは、全体として、まだ整備中という印象を受けた。

しかし、ランチを兼ねたプレゼンテーションでは、同博物館が見学者や子供たちに産業や技術の歴史的意義を解説するだけでなく、コンサートやクリスマス等のイベントを開催して地域住民や観光客、特に子供たちを積極的に呼び込み来客数を増加させていることが紹介されたが、これは博物館の教育活動や地域社会での在り方を示す一つの試みのように思えた。同博物館は、二〇〇五年〜二〇〇八年、EU委員会によるヨーロッパの産業遺産の保存活動をサポートするEU資金による「COSIST」のパイロット・プロジェクトの一つとなっている。夕方、ロワー・シレジアの中心地であるポーランド第二の都市ヴロツワフ(Wrocław、人口約六〇万)に到着し、一九世紀

後半に建設された水道施設のナ・グロブリ給水塔 (Na Grobli Water Tower) を見学した。この給水塔は、一八六九〜七一年にベルリンから来たイギリス人技術者によりオドラ川から導水し当時の二〇万人市民に水を供給するために建設された。特に、給水塔には、古いクレモン、ユニークな給水タンクやボイラ（一九四五年まで使用）が残され、給水技術として蒸気機関を用いた歴史的な発展を示す世界的にも貴重な建築物であると評価されることであった。給水塔にはみえない華麗な外観や人数制限で恐る恐る登った美しいらせん階段や装飾された柱など（写真11）、一九世紀の建築物へのこだわりもさることながら、この給水塔や先の操車場施設といひ社会主義体制の下で、あまり技術や設備の更新が行なわれなく維持・使用されたことが皮肉にも産業遺産としては幸いしたようにも思える。

中世からポーランド王国の古都とし一〇〇〇年の歴史をもつヴロツワフは、一七世紀からハプスブルク家のオーストリア領プロイセン王国（ドイツ帝国）領と変遷するなかで一六世紀のルネッサンス・マニエリスム、一七世紀のパロック様式の影響を受けた建築物が多く建設されたが、第二次世界大戦中のナチス・ドイツ軍と旧ソ連軍との戦闘によって建物の七〇%以上が破壊された。戦後の一九五〇年代以降に旧市街の建築物や多くの教会が再建され元の姿に復元された。夕食後、ライトアップされた市庁舎、金融家・商人館・アパートや教会のある旧市街広場 Ryne Square（写真12）を散策したが、多くの観光客を集めるこれら旧市街の多くは一三世紀を再現したものであり、言わば一七九五年以前のポーランドへの回帰でもある。

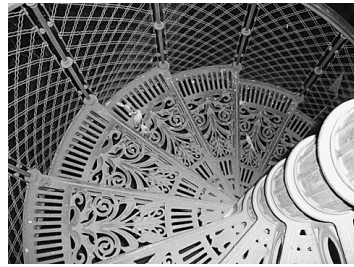


写真11 ナ・グロブリ給水塔の外観と内部の細工を施したらせん階段やデコレーションされた支柱



写真12 1856年建設のヴロツワフの中央駅(左)と復元された13世紀の旧市街広場と14世紀のエリザベス教会のライト・アップ(右)

五 ポーランド・アッパー・シレジアの産業遺産

九月七日(月)朝、アッパー・シレジアへへの出発の前にヴロツワフの世界遺産である美しいドーム型のセンチュリー・ホール(Centenary Hall)を見学した。同ホールは、プロイセン王国のフリードリヒ三世による対ナポレオン戦争の一〇〇年を記念し、有名な建築家Max Bergaがデザイン・建設し、一九一三年に完成したものである。高さ四二m・直径六九mのドームの建築としては当時最大のものであり、二〇世紀初期の現代主義建築の特徴をもち、奇跡的に戦火を免れたものであった(写真13)。

第二次世界大戦後のポーランドの社会主義政権下では、市民ホール(People's Hall)としてバスケット、バレーボール、ボクシング等の競技に使用されている。当日もバスケットのヨーロッパ選手権があるということで係員から頑に入館を拒絶されたものの、ホール関係の市当局の女性上司らしき人が、「いいのよ」という一言(もちろんポーランド語などは判らないが、多分そう言っていたのであろう)で、今度はいとも簡単に入館を許可された。上司に弱いのは、どこの国でも同じである。ホールの女関といい内部の美しいアーチといいその重厚な建築様式から、ドイツ帝国領であった当時を彷彿されるものであった。

古都ヴロツワフを後に、石炭・鉄・亜鉛などの鉱物資源を基盤にプロイセン王国・ドイツ帝国時代やその後の社会主義政権下のポーランドにおいても有数の鉱工業地帯であったアッパー・シレジアにむかった。

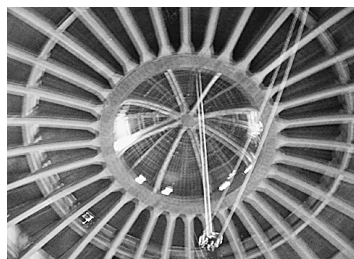
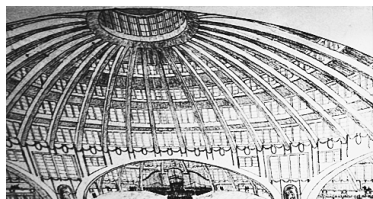
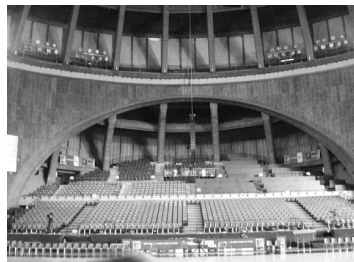


写真13 世界遺産のセンチュリー・ホールの概観（左）と内部（右の上下）

まず、アッパー・シレジアのかつての首都であったオポーレ（Opole）市近郊のオジメキ（Ozimek）で、一八二七年に建設されたヨーロッパ大陸で現存する最古の鑄鉄製つり橋（有名な英国の鉄製のアイアンブリッジ橋は、一七七九年に世界最初に建設された）を見学した（写真14）。この鑄鉄製つり橋は、一七五三年にプロイセン王フリードリヒ二世によって命ぜられ翌五四年に操業を始めたシレジア最初のマラパアニウ（Mala-Panew）製鉄所が、マラパアニウ（Mala Panew）川にかかる鉄橋として製作したものであり、シレジアへの産業革命の伝播を今に伝える貴重なものである。マラパアニウ製鉄所は、二五〇年の歴史を経た今日でも（二〇〇一年以降は「Huta Malapanew」社として）鑄造の製鉄生産を行なっているが、工場を見学した印象としては、日本の中規模程度の製鉄所であり、設備も古く社会主義政権下では設備投資や技術革新が余り進んでいなかったのではないかという感想をもった。

午後、アッパー・シレジアの有数の鉱工業都市であったザブジェ（Zabza）に到着したが、ここで、私たちは衰退した炭鉱遺産を市の行政機関と一体となり保存し「産業観光」に再利活用する試みをみる事ができた。

タルノフスキエ（Tarnowskię）を頂点にカルパティア（Carpathian）山脈を底辺とする三角地帯であるアッパー・シレジアでの石炭の採掘は、ハプスブルク家のオーストリア領の一七世紀の中頃から始まり、プロイセン王国（後にドイツ帝国）領に移った一八世紀末から一九世紀には産出高は急速に増加した。特に、中世からドイツ人の移住化が進んだザブジェは、アッ



写真14 ヨーロッパ最古のオジメキの铸铁製つり橋（左）と“Huta Malapanew”製鉄所（右）

パー・シレジアの鉱物資源を基盤に石炭業による鉱工業都市として発展した。なかでも、一七九一年に設立されたザブジェのクイーン・ルイーゼ (Queen Luiza) 鉱山とホジューフ (Chorzow) のキング (King) 鉱山は、プロイセンで最初の国営鉱山として最も重要な鉱山であった。二つの鉱山は、プロイセン鉱山局の指導下でプロイセンの鉱山技術を駆使した設備が完備された。一八世紀末から一九世紀にかけてのアップパー・シレジアでは、一七八七年に初めて導入された蒸気機関がイングリッドに次いで大規模に普及し、民間鉱山にも拡大した。

アップパー・シレジアでの製鉄・鉄鋼業・亜鉛精錬業の発展および一八四〇年代からの鉄道の普及により、石炭の需要は急速に拡大し、石炭の産出高は一八〇〇年四万一〇〇〇トンから一八五〇年九七万五〇〇〇トン、一八七〇年五八〇万トンへと増加した。また、鉄道の普及と製鉄業の発展は大量のコークスを使用したこととなり、ザブジェのクイーン・ルイーゼ鉱山を始めコークスの生産を拡大し、一八七三年にはアップパー・シレジアの一〇コークス炉のうち七つがザブジェにあり、コークス産業の中心地となったのである。これに伴いアップパー・シレジアの粗鋼生産も、一八五〇年六万トンから一八七三年三〇万八〇〇〇トン、一九〇〇年七四万八〇〇〇トンに増加したが、アップパー・シレジアでの石炭鉱床が枯渇し始めたために、製鉄所は石炭の輸入を開始したのであった。ザブジェを中心とするアップパー・シレジアにおける石炭の産出高は約三七〇〇万トン、鉱山労働者は一二万三千人となった。第一次世界大戦後にはアップパー・シレジアはドイツとポーランドに分割されたが、一九二

四年には全体で三六〇〇万トンの石炭を産出した。ドイツ領にとどまったザブジェは、一九一五年にドイツの將軍の名をとってヒンデンブルクと市名も変更されたのである。

第二次世界大戦後の社会主義体制の下では、石炭産業は国有化され中央計画と管理システムが導入され、重要産業に位置づけられた。化石燃料はポーランドのエネルギーの九八%を供給し、同国の重要な輸出品となった。戦後の急速な開発と新しい生産設備の導入と近代化により、ポーランド全体の石炭の産出高は一九五〇年七八〇〇万トンから一九八八年一億九三〇〇万トンとなった。しかしながら、一九八九年の民主化以降における自由経済の下で、炭鉱企業は再編成され、不採算企業は清算され、今日では五〇炭鉱が年間九七〇〇万トンを生産するだけとなった。第二次世界大戦後の社会主義政権下のポーランドでは、多くのドイツ系住民が強制的に追放・移住させられ名前もザブジェに復帰した同市は、石炭、鉄、亜鉛、鉛などの鉱物資源を基盤にアッパー・シレジアの鉱工業の中核都市の一角をなした。しかし、一九八九年の民主化以降は、不採算の鉄鋼プラントは閉鎖・民営化され、コークスプラントも最も近代的なザブジェの一プラントのみが操業している。石炭の世界的な供給は、中国、オーストラリア、ブラジルへと移りアッパー・シレジアに八〇近くあった炭鉱は、資源の枯渇や不採算性により閉山され二〇近くに減少した。こうした鉱工業の停滞と共にザブジェの人口も、一九七六年の二〇万四千人をピークに一九八二年に一九万五千人、二〇〇五年一八万五千人へと減少し、人口流出と失業者の増加が続いているのである。

一八世紀後半から二〇世紀中頃までプロイセン王国・ドイツ帝国領下で、豊富な鉱山資源を支えられ鉱業都市として発展し、第二次世界大戦後の社会主義政権下でもポーランドの中核的な鉱工業都市として発展したザブジェは、一九八九年民主化以降化学やエレクトロニクスへの産業転換を図ると共に炭鉱遺産を同市の歴史や文化に密接に関係するランドスケープ（景観）に位置づけ、「産業観光」都市への模索を始めたのであった。

私たちが訪問した歴史的炭鉱「ガイド」(Guido: Historical Coal Mine)や鉱山業遺産公園「クイーン・ルイーゼ」(Queen Luiza: Mining Heritage Park)は、一八・九世紀に開発され二〇世紀後半に閉山したアッパー・シレジアにおける炭鉱遺産を保存し「産業観光」に再利活用した代表的事例である。

ガイド炭鉱は、ドイツ、フランス、オーストラリアやポーランド等で多くの鉱山や工場を所有し、ザブジェ以外にもベルリンやパリ等で邸宅をもった、当時のヨーロッパで富裕家の一人であった Donnersmarck 一族(鉱山名 Guido は一族の公爵の名前)によって、一八五五年に開発され一八六〇年に操業を始めたものである。同炭鉱は、一八八五年には年産最高約三二・三万トンに達したが、一八八七年には収益性の低さからプロイセンに売却された。国営となったガイド炭鉱は、一九〇一年には一七〇mと三二〇mレベルの坑道で操業し、一九〇四年にはマコシヨビ(Makoszowy)の炭鉱と坑道で結ばれた。ガイド炭鉱は、一九二〇年代にはシレジアで最初の鉄製の坑内内梁を備え、近代的な巻き上げ機や蒸気機関を地下の搬送用に導入し設備の近代化を進めたが、一九二八年に石炭鉱床の枯渇のために

開発を終えた。第二次大戦争終了後のポーランドの社会主義政権下で、ガイド炭鉱はマコシヨビ炭鉱の一部となり、一九六七年以降は実験的炭鉱「Mysłowice」に移され炭鉱山の科学的研究と産出の一部を担った。一九八二年には炭鉱跡にザブジェ炭鉱博物館 (Coal Mining Museum) の分室がオープンし、一九八七年には堅坑槽や機械の文化的・歴史的価値が評価され、市の遺産リストに登録された。二〇〇〇年には Gwizde Coals 社が堅坑を埋め立て地下坑道の解体を決定したが、多くの機関と人々の努力により建造物は最終的には保存されることとなった。また、二〇〇七年に地上部分のみならず地下坑道の見学ツアーがオープンした。この地下坑道の見学コースは八〇m、一七〇m、三三〇mの三レベルで合計五一九一mもあり、一九世紀から二〇世紀の炭鉱に関わる設備や機械等を保存・展示し、歴史的・文化的な価値を有する産業遺産となっている。

私たちは一九九〇年代に建設され一九三二年鋼鉄製に建て替えられ二六mの美しい堅坑槽「Kolejowka」、一九二七年からのリフトや一九三四年のロープ滑車がある機械室などのガイド博物館の地上部を見学した後、ヘルメットを被り、正装の坑夫服を着た案内人に誘導され堅坑槽のリフトに乗り、Level 170m と Level 320m の見学コースへとむかった (写真15)。

Level 170m の坑道は、四〇〇mの長さがあり、一八八〇年代からの炭鉱の様子を駆け足で見学した (通常の見学時間は一時間半)。一八八〇年代からの地下坑道は、近代的な設備が加えられておらずオリジナルな姿を残しているとのことであり、炭鉱機械・道具や作業服が多数展示されるとともに地下坑内の



写真15 歴史的炭鉱ガイド博物館の美しい堅坑槽 (左)、1927年製のリフト (中央)、正装した坑夫衣を着た案内人 (右)

運搬用坑内軌道跡や鉱石搬送用台車が残り、一九二八年まで搬送作業に使用された四〇頭のためのレンガで内装された馬小屋がオリジナルな形で保存されていた。また二〇世紀初頭のスイスの会社による排水ポンプ設備が備わった部屋などが残されており、一九世紀の炭鉱の歴史的な施設や展示をみることもできた（写真16）。

Level 320の地下坑道は、一九世紀から二〇世紀にかけての炭鉱の展示場であり二二〇〇mの長さがあり、一九六七年からの実験鉱山であったMitsuiを引き継いだ大規模な近代的な炭鉱施設であった。ここには一九一四年のニシリンダーの電気コンプレッサーが設置されたコンプレッサー室や見学者への最大の呼び物である実際の石炭鉱脈へのAlpha掘削機や剪断機、コンベアーの模擬運転など迫力ある実演を見学した。また歓迎会やレストランとして使用できる地下の大規模なホールもあり、歓迎レセプションが催されたのであった（同写真16）。

次いで訪れた、現在、鉱山業遺産公園となっているクイーン・ルイゼ炭鉱は、一七九一年にプロイセン国営として最初に設立された当時の最大規模の鉱山であり、鉱山労働者から「シレジア工業の父」と呼ばれたプロイセン王フリードリヒ三世の王妃ルイゼの名前にちなんだものである。同炭鉱は、長きにわたってヨーロッパで最大かつ最新鋭の炭鉱の一つであった。一七九五年には最初の排水用ポンプが設置され、一八七〇年代以降には最新鋭の削岩機や電動式ドリルなどの炭鉱技術が導入されたが、一九七三年には採掘を止めた。一九九三年、堅坑槽・地下坑道や蒸気機関を備えた機械室の建物は、産業遺産に登録



写真16 ガイド炭鉱の地下見学コース（Level 170の馬の坑内搬送の再現、右上、Level 320の掘削機の模擬運転、左上）、地下のレストランと展示写真（右下、左下）

され炭鉱博物館の一部として「野外民族鉱山博物館（Open-air Ethnographic Mining Museum）」となった。

クイーン・ルイーゼ野外民族鉱山博物館は、地上部分と地下坑道から構成される。地上部の巻き上げ式の二五m堅坑槽や一九一五年から運転している最大級のニシリンダー蒸気機関による模擬運転が最大の「見せ物」であり、実際、迫力を感じさせるものであった（写真17）。地下坑道には、延べ約二kmに及ぶ見学者コースがあり、一九世紀から二〇世紀の今日までの炭鉱に関する歴史的に多様な技術や機械・道具が展示され、坑内軌道・トロツコの搬送施設や、また鉱脈への掘進・採炭機などの採掘機械や、ベルトコンベアーなどの実演も行なわれた。実際の見学ツアーは三時間であるが、見学時間の制約から駆け足の見察となったのは残念であったが、掘削機やベルトコンベアーの実演には圧倒されるものがあった。

また、このクイーン・ルイーゼ炭鉱には、一七九九年から一八六三年にかけてホジューフのキング鉱山との間に鉱石と石炭を運ぶための一四kmに及ぶ地下水路が建設され、一八一〇年頃からはグリヴィツェ（Griewitz）の製鉄所との地下の石炭水路も開通し、四隻のボートが一六tの石炭を運搬した。そこには、三つの港と五つの側線があり、水路の壁は木、石、レンガで作られ、高さ二・五m、幅は一・五mあったと言われている。一九五三年に解体され埋められたこれらの地下水路は、現在、観光客用として開放する作業が進められているとのことであった。

こうして一八世紀中頃からプロイセン王国・ドイツ帝国領下



写真17 クイーン・ルイーゼ炭鉱の堅坑槽（左）と動態保存された巻き上げ用の蒸気機関の模擬運転（右）

で豊富な鉱山資源に支えられ、さらに第二次世界大戦後も鉱工業都市として発展したザブジェは、鉱山資源の枯渇や一九八九年の民主化後における自由経済の進展を推進するために産業転換を図る一方で、衰退した炭鉱がザブジェの歴史や文化と密接に関係しているとして保存し、「産業観光」への活用を試みている。これにより二〇〇三年にはポーランドの観光協会や政府観光局から「ザブジェ 産業観光都市」に認定され、シレジアの代表的な「産業観光都市」のモデルとなっているのである。

夕刻、二〇世紀初頭に建設されたカトプイツェ (Katowice) の鉱山労働者の共同住宅ニキシュビェツ (Nikiszowiec) を見学した(写真18)。このニキシュビェツは、一九〇八年〜一五年にかけて炭鉱労働者の共同住居・アパートとして建設され、約一〇〇年前の伝統的なシレジア様式を示すユニークな労働者住宅であり、世界遺産登録への整備を進めている。今日、約七〇〇〇名が居住しており、一九九七年には遺産保存会の保護の下で産業遺産のルートになっている。共同住宅はアパートとしての住居用だけでなく、ビジネスや教育上の会議やプレゼンテーション、家族でのパーティ、さらには旅行者への宿泊や長期滞在者への施設としても貸し出し、アッパー・シレジアの伝統と文化を伝える「観光施設」としての活用を見いだそうとしている。

七日夜半に、旧市街が世界遺産である古都クラクフ (Kraków) に到着し、ユダヤレストランでユダヤ料理と独特の物悲しいメロディのユダヤ音楽を聞ながらポーランドでのフェアウエル・パーティが催された。



写真18 カトプイツェの鉱山労働者の共同住宅ニキシュビェツ (左) とシレジアの伝統衣装をまとった案内人 (右上) / 改装された住宅内部 (右下)

このポーランドでのポスト・コングレス・ツァーの印象は、第一に、内容的には一八世紀中頃に以降にシレジアを領有したプロイセン王国・ドイツ帝国時代に進展した工業化における産業遺産であり、オルゼーの亜麻織物工場、ヤボジナ・シロンスカの鉄道施設、オジメキの鉄製つり橋、サブジェの炭鉱などはヨーロッパでの産業革命がシレジアに伝播したことを示す文化的・歴史的価値を有する遺産であったこと。また、シレジア産業・鉄道博物館での機関車や転車台における動態保存、サブジェでの地下坑道の見学ツアーにおける炭鉱機械や蒸気機関の動態保存は、規模や迫力の点で日本ではなかなかみられないものであった。

第二に、シレジアで炭鉱を中心に多くの産業遺産が残ったのは、皮肉にも第二次世界大戦後に帰属したポーランドの社会主義政権下においても、従来の機械設備の多くが長く使用・維持されたこと、また一九八九年の民主化以後の市場経済化・グローバル化の進展によって石炭鉱業などの競争力の脆弱性が露呈し、産業・地域が急速に衰退したことに起因するようになっている。しかし、第三に、一九八九年以降にこれら産業遺産が破壊されず保存されたのは、Gedder教授などの地道な活動や行政への働きかけがあったからに他ならない。それは、これら産業遺産を保存し「産業観光」(産業遺産の世界ブランドとしての世界遺産登録による観光客の誘致はそれを象徴)に活用し都市再生の一環を担う役割を期待するものである。しかし、こうした地道な努力は、産業遺産の活用・利用を通して子供たちの教育活動や人々の地域への誇りを高め、地域社会へのアイデンティ

ティーを形成する。これにより、急速に衰退する鉱工業都市の雇用・人口流失をくい止め、地域社会の再生に繋がると考えられる。

最後に、Gedder教授がポーランドを去るにあたって私たちにユダヤレストランでユダヤ音楽を聞かせたいと思った意図はなんだっただろうか？ もちろん、教授の思いをしるよしもないが、教授は最後に私たちに何を伝えたかったであろうか。かの「負の世界遺産」ともなった「アウシュビッツビルケウナ収容所」は、クラクフからわずか三〇四km、普通列車でも一時間余りの距離にある。

注

(1) 一九八九年「東欧革命」後は、ポーランド、チェコ共和国、スロヴァキア、ハンガリーの四カ国を「中欧」という表現が一般的となっているが、ここではさしあたり旧東欧と呼ぶこととする。

(2) TICHHでは、「産業遺産は歴史的、技術的、社会的、建築的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物からなる」(エンジニアタル憲章、TICHH産業遺産憲章)と定義している。産業遺産に関しては、さしあたり、平井東幸・種田明・堤一郎編著『初心者のための産業考古学入門 産業遺産を歩こう』東洋経済新報社、二〇〇九年を参照されたい。

(3) ザクセンは、古くは九世紀フランク王国カール大帝に征服されたザクセン部族の子孫であるリウドルフ家のハインリヒ一世が、九二九年マイセンに城壁を設置し、後に神聖

ローマ帝国皇帝となるその子であるオットー一世がここに辺境地として辺境伯を設け、一〇八九年にはヴェティン家が正式に辺境伯となった。他方、オットー一世は北方ザクセン（現在のニーダーザクセン）をビルング家にザクセン辺境伯（後にザクセン公）を授与し統治をまかせたが、ビルング家が絶えてからは、ザクセン公をめぐる継承者問題が絶えなかった。一三五六年に選帝公の資格を与えられたザクセン公に継承者が絶えると、一四二三年にヴェティン家はザクセン選帝公の地位を獲得する。ヴェティン家の兄弟での継承争いが行なわれるが、ドレスデンに居城を定めたアルブレヒトの孫モーリッツが一五四七年にザクセン選帝公の地位を奪取し、さらに一六九四年にフリードリヒ・アウグスト一世選帝公がポーランド王を兼ねるなど一八世紀中頃まで、ザクセン公国は繁栄期をむかえたのである。

(4) シレジアの産業遺産に関しては、当日、配布資料以外にポーランドについては、イェジ・ルコンフスキ、フベルト・サヴァツキ著（河野肇訳）『ケンブリッジ版世界各国史 ポーランドの歴史』創土社、二〇〇七年等を、また、プロイセン、ドイツについては、メアリー・ブルブロック（高野有限・高野淳訳）『ケンブリッジ版世界各国史 ドイツの歴史』創土社、二〇〇五年等を参照した。